

● 学会発表の内容

OPNは有用な胚となり得るか

医療法人社団 徐クリニックARTセンター

峰 千尋、清須 知栄子、伊藤 真理、中塚 愛、徐 東舜

■ 【目的】

今回、OPN胚の有用性を確認するため、胚発生能、妊娠率及び流産率について検討した。

■ 【対象及び方法】

2012年1月から2014年12月に採卵を行った1733周期7941個（平均年齢 38.1 ± 4.4 歳）を対象とした。OPN胚と2PN胚における分割率、Day5胚盤胞到達率、Day5良好胚盤胞到達率（3BB以上）、及び3BB以上のSETにおける妊娠率、流産率を比較し、受精方法別でも同様に成績を比較した。SET時の平均年齢は、OPN胚 35.5 ± 4.3 歳、2PN胚 35.7 ± 4.3 歳で、OPN由来胚を移植する際にはインフォームドコンセントを行い、同意を得た後に移植した。

■ 【結果】

対象の胚の内、OPN胚の割合は22.4%（1780/7941）、2PN胚は77.6%（6161/7941）であった。OPN胚vs. 2PN胚の発育は、分割率29.7%（528/1780）vs. 98.8%（6088/6161）、Day5胚盤胞到達率30.6%（158/516）vs. 60.8%（3567/5868）と、いずれもOPN胚が有意に低く、Day5良好胚盤胞到達率においては57.6%（91/158）vs. 46.3%（1653/3567）と、OPN胚は2PN胚より有意に高い結果であった。ICSI由来も同様に、分割率とDay5胚盤胞到達率においてはいずれもOPN胚が有意に低く、Day5良好胚盤胞到達率においては、OPN胚は2PN胚より有意に高い結果であった。一方、IVF由来の分割率及びDay5胚盤胞到達率においてはOPN胚が有意に低かったが、Day5良好胚盤胞到達率においては差を認めなかった。3BB以上のSETにおけるOPN胚と2PN胚の成績は、妊娠率55.9%（19/34）vs. 46.2%（308/666）、流産率31.6%（6/19）vs. 26.3%（81/308）と、各項目で有意な差を認めず、ICSI由来、IVF由来それぞれにおいても、各項目で有意な差を認めなかった。

■ 【結論】

受精方法に関わらず、OPN胚は、胚発育の過程で2PN胚と差が見られたが、形態良好な胚盤胞を移植した場合の妊娠率は良好であった。以上のことから、OPN胚を培養し、形態良好な胚盤胞が得られた場合、その胚を治療に用いることは有用であると考えられた。